プロローグ　2011年3月11日　14時46分　7

序章　全交流電源喪失　10
二波の津波によって原発は、全交流電源を喪失する（SBO）。五感を失った状態のなか、非常用のバッテリーで水位計を動かすことに成功したが、そもそもその水位計に疑いが生ずる。

第1章　保安院検査官はなぜ逃げたか　31
本来事故原発にいなければならない保安院の保安検査官は現場を離れ、原発から5キロのオフサイトセンターに逃げてしまう。そのオフサイトセンターも放射線量が上昇。

第2章　原子力緊急事態宣言　63
全交流電源喪失の報に「チェルノブイリのようになる」と危機感を募らせる首相。電源車の投入が失敗に終わり、炉心溶融が始まる。政府も東電もその事実を把握するが公表を恐れる。

第3章　ベント　102
格納容器から蒸気を逃がすベントをしなければ、格納容器自体が破損し、放射能が飛び散る。だが、高放射能のなか手動で弁をあけるという作業を、誰が命ずることができるのか。

第4章　1号機水素爆発　142
班目が「絶対ない」と言い切った水素爆発が、菅が野党党首に自信たっぷりに説明しているそのさなかに、1号機で起こる。東電は前に出ず協力企業による注水作業が始まることに。

第5章　住民避難　180
避難区域をどの時点でどこまでにするのか。避難中に、放射能の雲が住民を直撃することにならないか？　県がヨウ素剤服用の指示を出さないなか、住民服用の決断をした三春町町長。

第6章　危機の霧　224
各自治体は住民をいつどんな手段でどこまで避難させるかを独自に判断せざるを得なかった。東電社員の家族が真っ先に逃げるなか、放射性物質の霧プルームの直撃をうける避難住民。

第7章　3号機水素爆発　263
3号機の水素爆発が、2号機の格納容器の圧力を下げる装置を破壊。複合的な危機の連鎖のなか2号機の格納容器破損まで3時間の予測が。東電首脳部は「もうできることがない」。

第8章　運命の日　301
東電の清水社長が、最初は執拗な電話そしてついには官邸を訪れ「撤退」の許可を求める。絶望的な気分の官邸が現場の吉田所長に確認すると「まだがんばれる」。菅は東電本店へ。

第9章　対策統合本部　346
保安院は安全規制のプロを育ててこなかった。班目を委員長とする原子力安全委員会も班目の信用失墜で機能しない。そうしたなか、経産省の技官である安井正也が投入される。

第10章　自衛隊という「最後の砦（とりで）」　390
自衛隊は原子力災害派遣部隊を編成、空からの決死飛行での放水作戦を実施した。が、これは実際的な効果はなく、地上からの放水へとつなぐ意味を持った。機動隊、消防隊も参戦する。

第11章　放水　433
消防隊も警察隊も自治体に属し国が直接命令する権限はない。三者が集う冷却放水作業において指揮系統を一本化する必要が生じていた。自衛隊がその総合調整機能を担うことに。

下巻目次

第12章　トモダチ作戦
第13章　海軍vs国務省
第14章　ヨコスカ・ショック
第15章　ホソノ・プロセス
第16章　最悪のシナリオ
第17章　キリン登場
第18章　SPEEDIは動いているか
第19章　飯舘村異変
第20章　計画的避難区域
第21章　落城一日
終章　神の御加護
あとがき
お話を伺った方々
参考資料・参考文献

装幀　永井翔
カバーイラスト　増田寛